

# 私の嫉妬、あの人の嫉妬

花田美紗 釧路校教員養成課程

学校カリキュラム開発専攻1年

「最近気づいたことだが、私は嫉妬深い。」そう思いながら何気なく入った書店で、このタイトルを目にした。この本がどうしても気になる。目次に目を通し、著者紹介を見ると、なんと柴門ふみではないか。『東京ラブストーリー』『あすなろ白書』『同級生——人は、三度、恋をする——』どれも、誰もが一度は耳にしたことのある作品。これらを世に送り出した人物である柴門ふみが著した本。忘れられなくなるようなタイトル。さらに、サブタイトルの「嫉妬の正体」。まさに今考えていたことではないか。そもそも嫉妬はどこから派生しているのだろうか。そんなことを考え始めるともう、読まない理由が見つからなかった。

赤塚不二夫の国民的アニメ『天才バカボン』に登場する「バカボンのママ」。本作は、人間の嫉妬の正体について考える筆者が「どうしてあんなに美人で聡明で、しかも優しそうな女性が嫉妬を受けず、周りから祝福されるのだろうか」と疑問を抱くところから始まる。これは、著者の経験をもとに嫉妬を解析し、どうすれば嫉妬の苦しみから抜け出せるかを記した本である。

「努力のきっかけが他人への嫉妬である」という人は少なくないだろう。あの人は自分にはないものを持っている。悔しい。あの人だけには負けたくない。世の中の成功者の多くは、そのような嫉妬から大成している。筆者もその一人である。他人に嫉妬を覚えない、いわゆる「横並び時代」の小学校時代を終え、筆者は他人への妬みを認識する。その解析によれば、女の嫉妬と男の嫉妬は根本的に求めるものが違う。女性が幸せに嫉妬するのに対し、男性は成功に嫉妬するのだ。

女性は無意識のうちに、常に誰かと自分の幸せを比べてしまう。それも、自らが持っていない幸せを「自分と同等」、あるいは「自分より下」だと思っていた人間が手にしてしまったとき、嫉妬の炎は燃え上がる。そしてその「幸せ」とは、結局は愛情や祝福が自分に向けられているかどうかの問題なのである。私も女だからかどうかはわからないが、よくわかる話だ。女の、無意識だがしたたかな部分をどんどん言い当てられていく。女の汚れた競争心を見た気がした。

一方でなるほどと感じたのは男の嫉妬についてである。男性の嫉妬の対象は「社会的成功」。世の中にどれくらい認められるか、名を上げられるか、何かを成し遂げられるかが人生の最大の関心事であるというのだ。さらに男性は、自分が嫉妬心を抱いていることをみっともないと思っているのか、それを隠そうとして変に緊張感を出してきたりするのだそう。女性の嫉妬が比較的わかりやすいのに比べ、実に周りくどくてややこしい。これを筆者は男性の嫉妬としているが、私にはこの嫉妬も理解できる。どうせ働くのなら何かを

成し遂げたいし、それが周りの羨むような影響を及ぼせばさらに良いとも思う。

この感覚は、もしかすると若い世代に多いのかもしれない。昔と違って女性の社会進出が当たり前になり、男性と同等の仕事ができるようになった今の女性だからこそ感じる嫉妬なのではないだろうか。逆に仕事をしていない人も増え、現代は「男だから、女だから」で区切れる時代ではない。社会の変化が大衆の嫉妬の仕方にも影響しているのではないか。

最後に筆者の述べる嫉妬の解消法を紹介したい。それは「嫉妬のエネルギーを生きていくための力にする」こと。嫉妬する以前に「自分はダメなんだ」と投げ出してしまいがちな現代の若者に呼びかけるメッセージである。

誰かを嫉妬しているうちは、まだ立ち直るチャンスがある (p 160)

これを見たとき、嫉妬に対する悪い印象がガラリと変わった。嫉妬は言い換えれば向上心である。「うらやましい」と思ったのなら、行動を起こすか起こさないか。成功も幸せも、そこに答えがあるのだろう。

さて、最後に「バカボンのママはなぜ美人なのか」。この答えは、ぜひこの本を手にとって知っていただきたい。読み終えたとき、きっとあなた自身の嫉妬は、生きるエネルギーになっているはずだ。